論説

「政治漫画」の考察

――二〇一二年八月「領土問題」に関する「政治漫画」の分析――

茨木正治

Ⅰ　問題の所在

本論文は、新聞掲載の一コマ漫画（「政治漫画」）が二〇一二年八月の日本と諸外国の「領土問題」をどのように描いているかを明らかにするとともに、それを通じて現代ネット社会における「政治漫画」の意義を再確認することを目的とするものである。

携帯電話やスマートホンなど新しいメディアは、受け手の主体的な情報接触と選択を「可能に」した。しかし、こ

れらは従来のメディア（「伝統メディア」、竹下・藤竹、二〇一八）の特徴を失ったわけではない。テレビやラジオのような映像音響メディアと新聞・雑誌のような文字・活字メディアの双方の特徴の一部を継承している。そこには負の側面もある。例えば、情報の即時接触が即時理解を強いる。その結果ステレオタイプ認知がなされ、それに適合した態度や行動が養成される。また、情報の主体的な選択可能性が選択的接触行動を促進させ、好きなものしか接しない、他のものは拒否するという「閉じた情報空間」を生成する。ここに、認識や態度が一定の極端な方向に集中する「（分）極化」が生まれる。そこでの表現は過激になり、他者や異なる集団との分断が差別や偏見、包摂の強要と排除をもたらす。

ネットメディアの接触時間が放送メディアに近づき、端末普及率は九割を超えた状況にある現代、当該メディアの存在を無視することはできない、かつ上記の問題を考えるにあたり、「伝統メディア」からのアプローチをする必要があるのではないか。本稿では、「政治漫画」にその糸口を見出すことを試みる。

「政治漫画」はその画像的属性として、感情（「身体的表出を伴うような、一時的で急激な感情の動き」である情動――喜怒哀楽のような――を含む）を喚起させる働き――見て笑う――がある。一方、多様な情報を集約して提示する凝集機能――見てわかる、あるいは見方によっていろいろ見えるはたらき――をも持つ。それらが、「笑い」という感情表出のスタイルを纏って表現されることが多い。そこでは「笑う自分」と「笑われる対象」とを意識する「対象化」が行われる（河合、二〇〇六）。この「対象化」、少なくとも「立ち止まって考える契機をあたえるもの」を「政治漫画」は有している。この機能がネットメディアの負の側面を抑制する可能性をもつ可能性がある。

反面、「政治漫画」は、「笑い」以外の感情を人々に喚起させることもある。第二次世界大戦中、国策プロパガンダ

として敵国の首脳を悪魔のように描いた漫画が登場したのがよい例である。この場合には、ネットメディアにおける意見の「極化」を促進させる恐れがある。

本稿では、「政治漫画」の感情喚起における上記のような二つの側面を明らかにすべく、「政治漫画」の対象素材として、「外交問題」を取り上げる。「外交問題」は歴史的に国民感情を刺激する事例が多い争点である。また、決定過程が受け手からは不透明であり、かつ日常生活からは距離がある。人々にとって「難しくてわかりにくい」と感じやすい争点でもある。そのため、人々はメディア情報に依存しやすく、かつ「わかりやすい」（感情に訴える）情報を求める。そこにステレオタイプ的認知が介入し、感情の昂進や意見の「極化」を招く契機がある。そうした場面に「政治漫画」はどのように作用するか。感情を「笑い」によって抑制または解消させるか、はたまた、怒りを促進させるか。こうした問題を明らかにすべく、二〇一二年八月、韓国と竹島を、中国と尖閣諸島をそれぞれ「領土問題」として抱えた時期のメディア報道に「政治漫画」がどのように関与したかを探る。

Ⅱ　研究の背景となる理論

ここでは、本研究が従来の研究のどこに位置するかだけでなく、理論的背景となる諸研究の特徴と限界を紹介し、本論文の分析への繋がりを示す。本論文では「政治漫画」という画像が何を（内容）を扱い、どのように描き（修辞技法）、その背景にどのような見方・考え方（認知枠組み＝「フレーム」）があるかを明らかにすることを試みる。その目的に従来の研究を適合させようとする。

(1)「政治漫画」研究

1　フレーム研究

ものの見方に含まれる認知枠組みである「フレーム」研究は、心理学（スキーマ／シェマ）、社会学、現象学（現実構成）、マス・コミュニケーション研究（議題設定、フレーム）など多方面にわたり、かつ数量的分析や質的分析等、種々の方法論が用いられている。いずれも、ものの見方が考え方や振る舞い方を規定することが前提として存在する。本論文では「政治漫画」という画像の分析を行うため、Gamson らの諸研究（Gamson and Lasch, 1981, Gamson and Modigliani, 1989, Gamson and Stuart, 1992）を基にした。

2　レトリック研究

「政治漫画」の読み取りを体系づけたのが、Medhurst & Desousa（1981）であった。この研究では、図像解釈（何が描かれているか）の側面と、図像学的な側面（何を意図して描いているか）と両方の点で整理されていないところがあった。彼らの分類では、「主題設定」とその主題に関する「主張」や「意図」の引き出し方（「創案」）の項目は詳説されていたが、主題と意図との関係についてのレトリックの説明が不十分であった。また、図像解釈の面では、画像を解釈する際のいわゆる「コンテクスト」の構造――画像内の文字情報、画像外の掲載媒体上の文字や画像、掲載媒体を超えた「状況」一般――への考察が不明瞭であった。本研究では、メディアとしての属性をもつ「政治漫画」そのものと掲載媒体との関係と、掲載媒体外の政治・社会その他の諸状況とを区別した。

(2) 嫌悪感情研究

集団の統合や分断に、他者と認知される対象への感情が関与することは民族・人種差別や偏見の諸研究から明らかになっている（北村・唐沢、二〇一八）。たとえば他者への嫌悪が自集団の統合や凝集に影響することは、「外交問題」が内政問題を棚上げすることを想起すれば理解しやすい。「外交問題」への政治意識・態度を考察する際に、「態度」それ自体が社会心理学では「認知成分」、「感情成分」、「行動成分」に分けられるとされている。他国へとの「対立」をいかに解決すべきかという場合に、他国へのステレオタイプという「認知」が、嫌悪という「感情」によって、どのような「行動」を生み出すかが問われるというわけである。

嫌悪感情の研究は主に対人魅力研究として行われてきた（金山、二〇一六）。その中で金山らは、嫌悪感情を嫌悪対象に対する嫌悪の原因と嫌悪者の反応に分けて考察した（金山、二〇〇二、金山・山本二〇〇五）。また、集団間のネガティブ情動としての嫌悪としての位置づけがされてきた（北村・唐沢、二〇一八）。「外交問題」では、しばしば対象国を擬人化して表現することがある。たとえば、「中国は…～する」、「アメリカは…～する」という言説は、実体のない中国、アメリカ合衆国という国家を擬人化して表現したものとみなされうる。そこで本研究では、金山らの対人レベルの嫌悪感情研究の枠組みを、その限界を考慮しつつ利用することにした。

Ⅲ　二〇一二年八月の日・中・韓「領土問題」に関する政治漫画の分析

(1)　分析方法

1　分析対象

全国紙発行部数の多い順3紙『読売新聞』『朝日新聞』、『毎日新聞』（以下「読売」、「朝日」、「毎日」と略記）に二〇一二年七月一日から同年八月三一日までの間掲載された一コマ漫画（「政治漫画」八五点（「読売」二六点、「朝日」三五点、「毎日」二四点）を分析対象とした。この期間の「政治漫画」を、各紙縮刷版の目次分類を参考にし、「政治」、「外交」、「経済」、「運輸」、「労働」、「世界」、「文化」、「社会」の八項目に分け、一点ずつ一項目に分類した、分類は筆者を含め二名で行い、最終的には筆者が判断を下した。

2　方法

1.「政治漫画」のテーマ（フレーム）とレトリック

これらの「政治漫画」について、Gamson（1984）の「フレーム」概念とMedhust & Desousa（1981）のレトリック手法を組み合わせて、領土問題に関する八点の「政治漫画」を分析した。「政治漫画」に描かれている①「領土問題」とは何であったのか、それは②どのような視点に基づくもので、③どういった手法（レトリック）によって表現されているのかを明らかにしようとした。

まず①について、「領土問題」を構成するテーマを構成する要素「指標となる要素」を抽出して、複数の「政治漫

画」に登場する要素群を「パッケージ」として見出した。

次に、②として、個々の「政治漫画」に描かれているテーマに関する主張を構成するものとして、「パッケージ」を作る「ルール」（「フレーム」）を、新聞記事や「領土問題」に関する諸情報を基にして見出した。

それから、③として、①、②のそれぞれについて、すなわち、「パッケージ」と「フレーム」を導く手法を、Medhust & Desousa の画像のレトリック手法であるA1「創案」（主題設定）と作品の意図を抽出するレトリック手法であるA2「意向」とA4「記憶」（世界観の想起）を用いた。そして、このA1「創案」とA2「意向」相互に関連するレトリック手法として、いわゆるマンガ一般の表現に用いられる――マンガの描き方に登場することの多い――A4「表現形式」を援用した。

レトリックの枠組みは以下のとおりである。

表1 「政治漫画」分析のためのレトリック

A1 「創案」：テーマ想起のための、レトリック
- ① 政治常識：「政治過程」を想起させる事物・人物。
- ② 文化的示唆：大相撲の力士で与野党の対立を象徴させることなど
- ③ 個人の性格・容姿：キャラクター描写。似顔
- ④ 状況：特定の事象・事件、社会・政治的背景

A2 「意向」：主題誘導：フレーム
- ① 対比・対照
- ② 解説
- ③ 矛盾対立

A3 「表現形式」：指標要素、パッケージ

A4 「記憶」：世界観の共有；（メタ）フレーム

A5 「所作」：「外的情報」との関連

2. 極化と嫌悪感情

茨木（二〇一八）における記事の嫌悪感情表現を援用した（表2、表3）。日・中・韓「領土問題」を描いた「政治

漫画」に描かれている内容に対する嫌悪感情を、嫌悪の対象（中国・韓国）に対する嫌悪の度合い、それが生じた原因（嫌悪原因）、および嫌悪者がとった対応（嫌悪者の反応）の三つの項目に分類した。

3. A5「所作」の考察

「政治漫画」のフレームとレトリックをより明確にするために、「政治漫画」の画像とその外部環境との関係を探った。具体的には、「政治漫画」掲載された新聞（「朝日」）の同時期に掲載された社説・論説（記名コラム含む）――「天声人語」、「素粒子」――および読者投稿――「声」（投書）、「かたえくぼ」（コント）、「朝日川柳」――について、分析方法1. 2.を用い、フレームと表現技巧、嫌悪感情の度合いを測定し、「政治漫画」のそれらと比較した。

表2　嫌悪の原因

1　身勝手
2　傲慢
3　異質さ
4　計算高さ
5　否定的態度
6　非魅力的外見
7　その他

表3　嫌悪者の反応

1　取り入り
2　穏便解決、迎合
3　積極的解決、関係修復・維持
4　わりきり、局外者扱い
5　接触回避
6　陰口
7　意地悪な行為・態度
8　その他

(2) 分析結果と考察

1. 全体的傾向

上記の「分析対象」における分類から、「領土問題」に関する「政治漫画」を抽出した。それらは、「外交」の項目だけにあり、七月に二点、八月に五点の計七点であった。これらはすべて「朝日」掲載の「政治漫画」であった。七月の「外交」における作品は、北方領土とアメリカ軍垂直離着陸輸送機オスプレイ配置の問題に関するものであった。

また、「政治漫画」には、七・八月を通じて、「政治」特に内閣の政治運営と「領土問題」を組み合わせているものが「読売」が五点、「朝日」と「毎日」がそれぞれ一点ずつあった。

「政治漫画」には、複数の題材が用いられていることが知られている（茨木、一九九七）。そこで、「政治」と「外交」を組み合わせた七点と八月の米ロを扱った「外交」の二点を、「領土問題」を描いた「政治漫画」の「所作」とみなした。すなわち、「政治」と「外交」の七点と、米ロ外交の七月の二点を「外交」を表わす「政治漫画」の基準点として、それらからの逸脱状況をのちの項でみることにした。

表4　2012年8月の日中・日韓の「領土問題」に関する主な出来事

8・10	李明博韓国大統領竹島上陸
8・13	李明博大統領が韓国忠清北道での勉強会で「天皇謝罪」を要求
8・15	香港活動家魚釣島上陸　野田首相抗議
8・17	魚釣島上陸活動家香港強制送還決定
	日本地方議員ら魚釣島へ上陸
8・22	李明博大統領日本からの親書受取り拒否
8・24	野田首相領土問題で記者会見
8・27	丹羽駐中国大使の車が襲われる

2. 二〇一二年八月の「領土問題」を扱った「政治漫画」の分析と結果

――「テーマ」と「フレーム」・「レトリック」による分析――

八月において日韓・日中の「領土問題」として生じた主な出来事を表4のようにまとめた。

二〇一二年五月に温家宝・野田佳彦両国首相による北京での会談が行われた後、六・七月に台湾活動家、中国漁船団の領海侵犯という出来事が生じた。それを受けてまず「政治漫画」では中国との尖閣諸島問題を扱っている、それを皮切りに、

図１　（12・8・17「朝日」）

ロシア首相国後島訪問と李明博大統領の竹島上陸を扱った「政治漫画」が続く。そして、一度「領土問題」における外交姿勢を問う「総括的な」「政治漫画」が掲載された後、李明博大統領の竹島上陸問題が再燃して「政治漫画」のテーマとなった。

八月の「領土問題」を扱った「政治漫画」における「テーマ」と「フレーム」は、表5のようにまとめることができる。

これをもとに、個々の「政治漫画」について、どのようなレトリックが用いられているのかを見てみよう。図1は、尖閣諸島の「中国による占拠」に対して、ようやく毅然とした対応をすると発言した野田佳彦首相の顔が描かれた島の画である。図1ではA1からA3までの技法が使われている。A1の「創案＝主題設定」では、「政治問題」であることを示すべく、政治家の似顔（野田首相と温家宝中国首相）が描かれ、「状況」描写は政治家似顔と島嶼の画とプラカードの文字情報から読者が読みとれるようになってい

表5　2012年8月の「領土問題」をテーマとした「政治漫画」の「フレーム」

月日	キャプション	内容	関連する出来事	指標となる要素	パッケージ	フレーム
12・08・17	ようやく強気	野田首相の顔の尖閣諸島が、雲に描かれている温家宝中国首相の顔に向かって「尖閣諸島　別名厳正に対処島」のプラカードを示している。	8・16　尖閣で14人逮捕　香港船不法上陸・入国容疑　強制送還　野田首相　中国大使に抗議	A1②プラカード＝抗議、抵抗：③野田首相・温家宝首相似顔「厳正に対処」野田首相の　クリーシェ　④尖閣列島香港船問題　島に顔　A2　対比対象：尖閣（地）「プラカード」⇔雲（天）　A3　②対等な大きさ（温家宝＝野田）　④ようやく～厳正に対処（毅然）　⑤位置関係：前景（野田）＞後景（温）　主役は野田　上下／天地　温＞野田	A1②　A3④　⑤抵抗の意思表示と（見える結末（A2対比　A3⑤上下））	A1、A3　尖閣諸島の占拠に日本として強く抗議するという意思表示⇒野田首相が初めて？見せた「強気」の外交姿勢
12・08・18	続々とやってくる	構える野田（首相）捕手に向かって、ホーム（領土問題）を狙うメドベージェフ・ロシア首相と李明博・韓国大統領	7・3　メドベージェフ首相　国後島訪問　8・10李明博大統領竹島上陸	A1：②文化　野球　走者（ロ：韓）ホームインを狙う　捕手（日）　ホームベース　（領土問題：島の画）　③似顔（野田・李明博・メドベージェフ）　④竹島・北方領土　A2①：対比対照　走者（ロ：韓）　ホームインを狙う＝攻撃　捕手（日）守備　A3　②大きさ（日韓露）同じ　③互いに対決姿勢　④画像＜キャプション「続々と…」攻撃側主眼　⑥本塁突入　（露・韓）動⇔ホームブロック（日）静	A1②野球　攻守（A2①、A3⑥）　外交交渉の攻守	領土占有の主張・実行に野田首相（日本）がどう立ち向かうか
12・08・22	「歴史にちょっと細工をすれば簡単に島も手に入るさ」という思想	歴史書に、島（竹島）を書き足す人	8・11　領土実効支配　第三国の承認得ず統治（日経）	A1②文化捏造：歴史　④竹島上陸（李明博韓国大統領）A2③矛盾対立　悪意強調　A3　①暗いトーン　②島の大きさ　影絵　③人物不明　怪しさ　④「歴史に…細工」	A1②文化捏造：歴史　④竹島上陸（李明博韓国大統領）　A2③矛盾対立　悪意強調　A3　①暗いトーン　②島の大きさ　影絵　③人物不明　怪しさ　④「歴史に…細工」怪しさ・陰謀	領土問題の正統化に歴史の捏造がある
12・08・23	「領土オリンピック」負けたら大変赤っ恥国	国際司法裁判所で判断される領土問題が多数	8・11国際司法裁へ提訴検討　竹島問題で玄葉光一郎外相表明　韓国高官「提訴応じぬ」	A1①「国際司法裁判所」の文字　②地球＝国際　五輪－国家競争③提訴国：真面目、深刻・真剣な顔⇔裁判官：地球の無表情、機械的な口調のフキダシ　④竹島問題提訴　ロンドン五輪　A2：①深刻な提訴側の表情⇔裁く側の機械的処理　②解説：キャプション＋文字　A3④文字と画像　⑤上部集中：提訴案件の多さ⇒機械的処理（机上にサイコロ／裁判官＝地球のフキダシ）	A3④文字と画像　⑤上部集中：提訴案件の多さ⇒機械的処理（机上にサイコロ／裁判官＝地球のフキダシ）⇒提訴国真剣、裁判所側―やっつけ	領土問題は五輪同様「国の威信」をかけた事案だが、裁く方は熱意なし。
12・08・24	これが「韓流支持率稼ぎ」！？修繕費は自分で払うんでしょうな！自分で！	日韓関係の架け橋を李明博大統領がハンマーで壊している	8・21　2012年大統領選与党候補に朴槿恵氏　8・22　竹島問題で一時帰国　駐韓大使、帰任へ　8・22竹島過熱に懸念　日本　冷静対応アピール　韓国「国益か」疑問視も　8・23　竹島問題、異例の対応野田首相親書　韓国が返送へ	A1：②吊り橋＝架橋　③李明博大統領　④竹島問題　韓国大統領選挙　A2：②解説：関係破壊（ハンマーで吊り橋破壊）　③矛盾対立：破壊行為への反感情勢　吊り橋から自らも落ちることを示唆⇒愚鈍　A3：②吊り橋＞李明博大統領日韓関係の大きさ　破壊行為の重大さ　③李明博大統領の顔：エキセントリック　④行為責任の追及　⑥破壊の激しさ：自暴自棄を彷彿	A1：②吊り橋＝架橋　A3：②吊り橋＞李明博大統領　日韓関係の大きさ　破壊行為の重大さ　③李明博大統領の顔：エキセントリック　④行為責任の追及	李明博の行為は日韓関係において極めて被害甚大だ。彼自身の自暴自棄行為でもあるのは、大統領再選の低さを反映か。

る。「プラカード」は政治・社会的運動をする際に、よく用いられる「政治・文化的示唆」である。前述した5月の北京での会談の当事者がこの二人であることからも、尖閣諸島をめぐる「領土問題」であることを示唆する。図1ではA2の「意向」は、A3の「表現形式」と組み合わさっている。日中の首脳の、「外交問題」に関する政治的優位性の違いが、「対比」のレトリックで表わされている。すなわち位置関係でみると、この絵の中心には野田首相が、温家宝首相は画像の左上部に描かれている。ここだけ見れば野田首相の方が優位にあるように見える。しかし、これは諷刺の対象として野田首相が注目されているにすぎない。むしろ図1では、天＝雲で描かれた温家宝首相と、地＝島で表現された野田首相との「対比」が重要である。「尖閣諸島、厳正に対処島」と書かれたプラカードを持っていること自体が、抗議する反対派＝権力的に弱者、というイメージを彷彿させる。

図2　B・フランクリンが描いたとされる1枚画
（茨木、2007　p23）

Non Votis Benjamin Franklin Plan Truth, 1747.

これに対して、悠然と構える「雲の上の人」である温家宝首相は、彼個人の立場というよりは、中国という国家が有する「尖閣問題」に関する日本への優位性を示している。雲の上の存在が地の人たちとの差異を示す例として米国建国期の

図３　（19・2・16「毎日」）

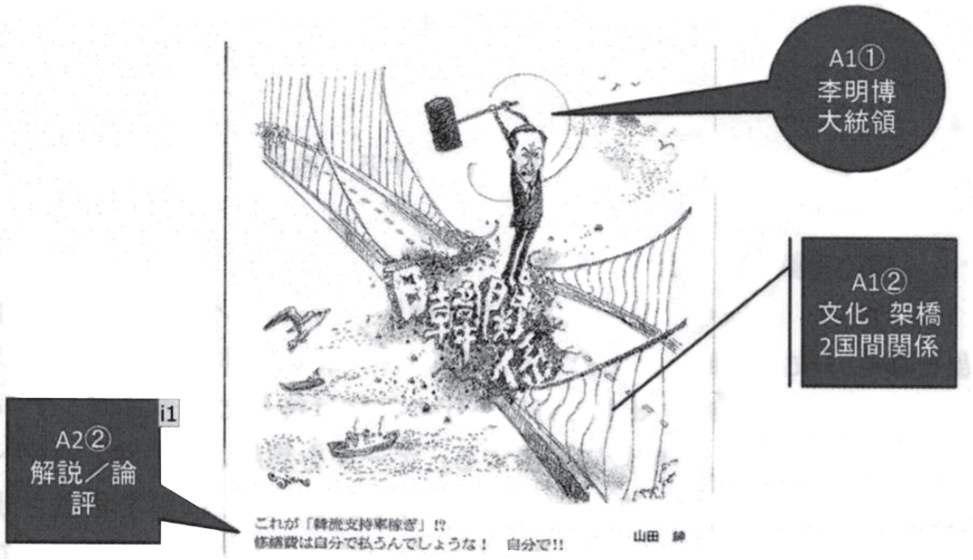
フランクリンによる画（図２）や、この世の存在とあの世の存在を峻別する（個人を透明もしくは雲の上に置く描き方）手法のもの（図３）があげられる。

また、Ａ２「意向」のサブカテゴリーである「対比」は、「キャプション」（見出し）と連動している、「ようやく強気」という見出しから、「尖閣諸島」をめぐる問題について日本側の姿勢がどうであったのかが示されている。ところが、「厳正に対処」という表現は、野田首相が当時使っていた決り文句でもあった。そうすると、「対比」は、尖閣諸島に対する中国側の占有に抗議する仕方の積極性を述べているというよりも、「（文字通りには）ようやく強気（しかし…）」という含みを持った「腰の引けた強気な態度」を意味するともみられよう。

これらのレトリックが、中国との領土問題に対する野田首相の対応を「弱腰」と批判する「フレーム」を導いていくのである。

図４では、李明博韓国大統領が、自ら竹島に上陸したことを背景に日韓関係という吊り橋をハンマーで破壊しようとしている「政治漫画」である。Ａ１「創案」では、政治家の似顔を図１と同様に使ってそれによって「政治」を読者に想起させる。日韓関係をＡ１の②で読者に喚起させたのち、「日韓関係」という説明のついた「架橋」を破壊す

図４　（12・8・24「朝日」）



る行為の問題性を指摘する。二国間関係を「架橋」で表わすことは、その橋の長さ・大きさが相互間の隔たりの大きさを表わす。加えて、架橋の長さは、関係の歴史の長さを象徴している。Ａ2で示そうとする「意図」は、破壊行為そのものへの非難である。それゆえ、見ればわかるという意味で「解説」のレトリックが用いられている。それとともに、その背景をＡ3「表現技巧」の「キャプション」に書かれている文字情報が補足する。なぜ李明博大統領は日韓関係を破壊しようとしたのか、その理由の一つを「政治漫画」は「韓流支持率稼ぎ」、つまり次期大統領選挙を見据えた国内支持率の回復策であるとしている。これらのＡ群のレトリックによって、「政治」〉「日韓関係」〉「破壊行為＝竹島上陸を軸とする一連の日本攻撃」というように焦点を読者に絞らせるのである。

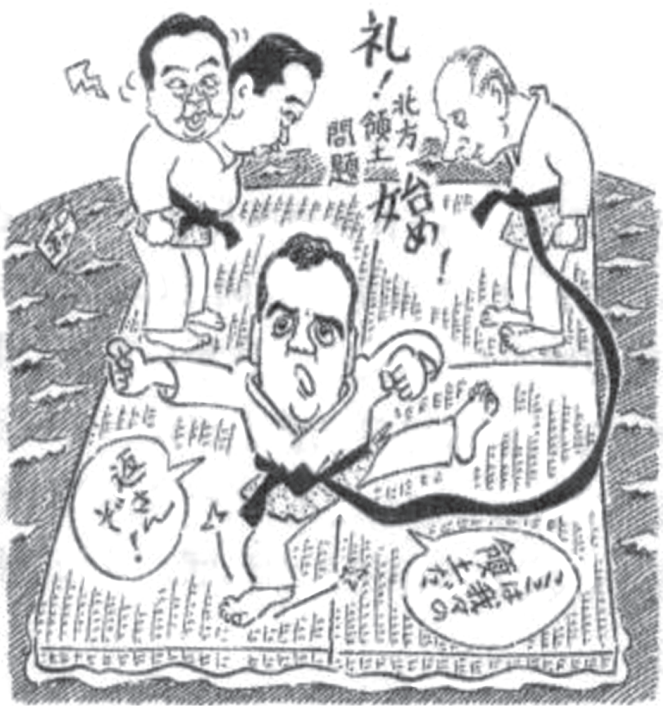
3.「所作」レトリックを通した8月の「領土問題」に関する「政治漫画」の分析

i　近隣テーマの「政治漫画」との比較

日韓・日中の「領土問題」を描く「政治漫画」を、他国、特にロシ

ア・アメリカ合衆国との「外交」問題を描く「政治漫画」と比較する。図5では、日本とロシア首脳が対峙する構図になっている。これらでは、日本の野田首相の役割は後景に退き、ロシア（プーチン大統領、メドベージェフ首相）が前景に登場する。テーマを想起させるA1のレトリックでは、図5で柔道（プーチン大統領は実際に柔道の有段者である）が、交渉を象徴させるものとして「文化的示唆」要素を形作っている。問題は、その関わり方である。図1では、温家宝首相が超然とした存在であり、野田首相の対応も決まり文句であるため実効性に疑いはあるという視点ではあるが、交渉において、相手国の領土侵犯を「厳正に対処」しようとする姿勢は示している。「厳正対処」というプラカードを持つという「抗議行動」で示すことは、相手がこの行為に対して何らかの意味を読み取ることを期待していることでもある。それに対して、図5では、六月に日ロ首脳会談を終え、交渉が進もうとするときに、メドベージェフ首相の国後島訪問時の発言（「一寸たりとも返さない」）の強い意志が、画像上のメドベージェフ首相の動き（礼をせずに動き出す）に表わされている。

図5　（12・7・5「朝日」）



A3の表情、動き、キャプションが、A2の二重の「対比」を生み出し、「領土問題」を契機としたロシアという国への不信感、判断のしにくさを「フレーム」として持ってい

ることがわかる。つまり、大統領は礼をし、首相は非礼であるという対照的な振る舞いが、「対比」であり、それとともに（それを見た）野田首相の「驚き」と大統領の「無表情」が対照的であることの二重の「対比」が用いられている。これによって、ロシア首脳の二重基準が示されるため、日本側から見て「何を考えているかわからない」という不信感が醸成される。

図6　（12・7・18「朝日」）

図6は、垂直離着陸機オスプレイの在日米軍基地への導入をめぐる「政治漫画」である。オスプレイそのものが描かれており、しかもその両方の翼にオバマ大統領と野田首相が「乗って」いる。A1は似顔と軍用機から「外交」「防衛＝軍事」問題であることがわかる。ここで注目すべきは、オスプレイの両翼に日米首脳が乗っていることである。オスプレイに同乗しているということは、米軍に少なくとも野田首相は同化しているということである。両首脳が一応日米両国を代表する存在とすれば、日米関係は日本が合衆国に包括されているとみることができる。

ここで、「政治漫画」にみられる日本と韓国・中国・ロシア・合衆国とのこの時期の関わり方について整理するならば、

次のようになる。韓国には批判可能な関係であり、中国に対しては批判の意思はあるが、相手との距離は大きい。ロシアには不信感と不透明感をもち、対処に苦しむ姿が描かれる。合衆国に至っては、恭順の対象であり同化・包摂関係であるため批判的姿勢は政府においては存在しない。

ii　文字テクスト（論説・コラム／投稿）との比較

前項までの「政治漫画」の考察は、「政治漫画」を掲載媒体から切り離したひとつの独立したメディアとして、その内容を探るものであった。実際に「政治漫画」を読むときには掲載媒体である新聞紙上において読む。つまり、掲載媒体の他の文字テクストからの影響を考慮する必要がある。以下では、「政治漫画」のメッセージ性（「評論」性）に着目して、それに比する新聞紙上の二つの種類の「文字テクスト」との比較を行った。一つは、新聞編集側の意向が直接反映される「論説・コラム」である。もう一つは、新聞読者の投稿による「投書」である。

その1　論説・コラムと「政治漫画」（表6）

八月の「朝日」に掲載された「領土問題」に関する論説・コラムは、四一件あった。識者コメントは六件であった。この中で、魚釣島に香港の活動家が上陸したことに関する「評価」（主張・感想）を除くと、中国の「尖閣問題」を単独で扱ったものは「社説」の一件のみであった。それに比べて、韓国との「竹島問題」を単独で取り上げたのは、「社説」八件中四件、「天声人語」二件中一件、「素粒子」三一件中六件であった。ここから、この時期の「朝日」は、中国と日本の領土問題を論評する際の多くは、韓国とセットであったことがわかる。ここにおいても、「政治漫画」

表6 「領土問題」の「論説・コラム」

（「社」は「社説」、「素」は「素粒子」、「川」は「朝日川柳」をそれぞれ示す）

月日	種類	見出し
8月4日	社	オスプレイ　普天間移設の道筋示せ
	素	オスプレイは「安全に作戦任務を遂行する」と米国防長官。力点は任務遂行の方に。ではいつ安全宣言かの問題。
8月11日	社	竹島への訪問　大統領の分別なき行い
	川	いろいろな場所でやってる日韓戦
	声	日韓のネット批判に心痛める
	素	すきを突いた韓国の速攻。自陣のラインががたがたで防ぎ切れず。増税の日を狙ったかのように李大統領が竹島に。
		中国ともロシアとも韓国ともギクシャク。元より北朝鮮は話にならず。いよいよ米国頼みの単細胞になりそうな。
		あふれる韓流やKポップ。どこにでもある韓国食材。この落差は何？在日の友とマッコリ飲みながら考えよう。
8月12日	社	韓国大統領の竹島入り　大国らしからぬ振る舞い
8月15日	素	昔、母に聞いたお手玉歌。日清戦争、三韓征伐…。すり込まれた歴史。李大統領の目に「恨」の文字が見える。
8月16日	天声人語	韓国大統領「ご乱心」
	ニュースがわからん	竹島問題、なぜおさまらないの？併合の歴史が韓国の反日感情をかき立てるんだ
	社	近隣と靖国　互いにいがみ合う時か
	川	調子はずれの真夏のソナタ
		唐突に隣のおやじの胴間声
		内閣の助言と承認知らぬ李氏
	素	ナショナリズムという怪獣が海から上がってくる。いざ迎撃。よく見りゃ着ぐるみかもしれぬ。
		追悼の週に周囲の海が騒がしい。前世紀のつけが一度に回ってきたような。それぞれ事情はもつれあい絡み合い。
		毅然として冷静に。海に囲まれ海に生き、海の恵みも怖さも知る民として。四海波静かにならねば国も治まらぬ。
8月17日	社	尖閣上陸　混乱招かぬ備えを
	川	どの国も島が不満の捌けどころ
		煮えたぎるチゲにどじょうは泥の中
		東海の小島の磯のお戯れ
	声	竹島、国際世論へ訴えかけよ
	素	「愛してる」って言えますか。恋人にだって気恥ずかしい。まして国に。「好き」なら言えそうな気もするけど。
		ホー・チ・ミンは別名「阮愛国」。むき出しの愛国は独立闘争の中でこそ。中国も韓国ももう立派な主要国なのに。
		愛の字を分解すると、ゆっくり歩きつつ振り返る心。「過去に根ざしながら未来に向かう優しさ」と阿辻哲次さん。
8月18日	声	韓国に政府の真剣さを示せ
	川	活動家などと呼ぶから付け上がる
		活動家ふだんは何をしてるやら
		鯱も呆れる非難合戦
	素	誓死光復釣魚台列嶼。漢字の羅列には遊びがない。強硬の一本槍。巡視船に投げ込んだ四角く硬い煉瓦のごとく。
		香港活動家ノゴツイ顔ト李大統領ノ鋭イ目ガ当分頭カラ離レナイ。ヨッテタカッテイジメラレテイルミタイダヨ。
		ちょいとみなさん。さわぎゃあいいってもんじゃないでしょ。そこおすわんなさい。ちゃんとはなしをするのよ。
8月20日	素	投げ返すれんがはブロックになり岩になり。また回り始めるか日中の負のサイクル。沖縄の人の目にはどう映る。

8月21日	天声人語	焦げつきやすい領土問題
	社	尖閣と竹島　政治が対立をあおるな
	声	尖閣　事なかれ主義はやめよ
		強制送還だけでは再発防げぬ
	川	反日のデモか銀座のパレードか
		上陸のマナーは日中変わりなし
		丁寧な扱いに感謝また来ます
	インタビュー田中均	中韓に日本はどう向き合うか　勘定は国益を損なう「大きな絵」を描き共通の利益を追え
8月23日	社	竹島提訴　大局に立つ日韓関係を
	声	不法上陸　重罰化では解決せず
		領土問題　経済外交に重点を
		オスプレイ、操縦ミスこそ問題
	川	人為ミス操作が難しい証拠
	素	宛先不明でなし。読まずに食べたわけでなし。親書返送の奇手。開けちゃったけど見なかったことにしたいわけ？
8月24日	声	尖閣上陸　強制送還は妥当だ
		日中友好「魚釣りの島」を夢想
	川	投げ出した事も忘れて旗の下
		官房長官何が起きても遺憾だけ
		太公望ぜひ釣りしたい島があり
	素	払うときの大変さは知りながら。強気や自尊がぶつかって掛け金ばかりがつり上がる。どちらも勝てない日韓勝負。
		米国産の渡り鳥。羽音が大きく飛ぶのが下手でハワイじゃ飛ばせてもらえない。だから山口や沖縄で羽を伸ばす？
8月25日	素	いきなりリングに飛び込んできた李大統領。ならばとロープをくぐる野田首相。任期終了ゴングまでにらみ合う？
8月26日	社	日本と韓国　非難の応酬に益はない
	声	「活動家」の扇動に乗らないで
		領土問題で溝つくらないで
		駐中国大使交代に疑問感じる
	かたえくぼ	『今年の漢字』　島　日本政府
	ニュースがわからん	国際司法裁判所って何じゃ？国どうしの争いを審理する、国連の機関だよ
8月27日	声	領土問題は冷静に話し合おう
8月28日	川	過去未来すべての事故は人為ミス
		日中韓天気晴朗波高し
		句作りが過激になって困ってる
	かたえくぼ	『親書返送』　食べちゃえ　白ヤギ黒ヤギ
	声	サミット開き情と理の外交を
8月29日	社	近隣外交　挑発に振り回されまい
	記者有論	日韓関係　日本の努力知ってほしい
	声	こだわりを捨て歩み寄りを（西部）
	素	薄皮がはる間もなく、かきむしる輩多し。しかも隣人の傷を。中国にも韓国にも日本にも。そっと我慢ができず。
8月31日	川	オスプレイぜひ郵送で返したい
	耕論	中韓ともつれる日本
		戦略的なパイプ作りを急げ
		経済力で押す時代ではない
		多元的な関係が「防波堤」に
	池上彰の新聞ななめ読み	尖閣報道　テレビより詳しい解説を
	素	世界の人の半分が住む東アジアが自由貿易圏を目指す。日中韓も。ちまちまもめてないで、大きな話がしたいね。
		うれしいのは韓国に勝ったからでなく。なでしこの妹分元気よし。スキーの高梨紗羅は15歳で高卒の大ジャンプ。

それ自体の分析で言及したように、「領土問題」については中国と韓国との関わり方に違いがみられる。

ここでは、図4と関連する論説・コラムとを主題設定と意向＝「フレーム」の点から比較する。「社説」では、「分別なき行い」（8／11、八月一一日掲載の略　以下同じ）、「大国らしからぬ振る舞い」（8／12）など、大統領個人の行為を倫理的に咎める姿勢が目に付く。「天声人語」（8／16）の「ご乱心」、「素粒子」の「すきを突いた韓国の速攻」（8／11）、という茶化した表現も、大統領個人に還元する含みがある。図4のキャプションでも「…修繕費は自分で払うんでしょうな！自分で！」とあった。図4の「政治漫画」では、李大統領個人への批判が、韓国政府・韓国国民へ向けられる可能性があった。しかし、「韓流、Kポップ、どこにでもある韓国食材、この落差は何？」という主張がすでに八月一一日付「素粒子」によって語られている。

ここに、韓国大統領という役職や韓国政府という組織と、李明博氏個人とを切り離そうとする試みの萌芽が見える。この姿勢が論説やコラムが八月後半になって、ナショナリズムやポピュリズムの覚醒や極端化につながることを懸念する主張に連動する。これは、中国を含めた「領土問題」一般に関する主張ともつながるとともに、国際司法裁判所への竹島問題の提訴や、韓国政府による親書返送という個別的行為についても「社説」では、「大局に立つ」（8／23）、「非難の応酬に益はない」（8／26）、「素粒子」では、チキン・レースの様相を危惧する「どちらも勝てない日韓勝負」（8／24）といった主張をすることになるのである。

その2　投書と「政治漫画」（表7）

文字テクストにおいて、論説・コラムは発信者が掲載新聞に属する（それに関わる）人たちであるから、掲載媒体の意向を直接反映するものであった。ここで扱う投書・投稿は掲載媒体の受け手（読者）によるものである。それゆ

え、当該媒体の意向を直接無媒介には反映しない。本論で扱う投書は、いわゆる新聞投書である「声」、コントの形をとる投稿「かたえくぼ」、および「朝日川柳」である。これらが、図4を読むための「所作」としてどのように作用しているかをみる。

表7 「領土問題」の「投書」

（「川」は「朝日川柳」を示す、（西部）は、西部版掲載の作品を示す）

月日	種類	見出し
8月11日	川	いろいろな場所でやってる日韓戦
	声	日韓のネット批判に心痛める
8月16日	川	調子はずれの真夏のソナタ
		唐突に隣のおやじの胴間声
		内閣の助言と承認知らぬ李氏
8月17日	川	どの国も島が不満の捌けどころ
		煮えたぎるチゲにどじょうは泥の中
		東海の小島の磯のお戯れ
	声	竹島、国際世論へ訴えかけよ
8月18日	声	韓国に政府の真剣さを示せ
	川	活動家などと呼ぶから付け上がる
		活動家ふだんは何をしてるやら
		鯱も呆れる非難合戦
8月21日	声	尖閣　事なかれ主義はやめよ
		強制送還だけでは再発防げぬ
	川	反日のデモか銀座のパレードか
		上陸のマナーは日中変わりなし
		丁寧な扱いに感謝また来ます
8月23日	声	不法上陸　重罰化では解決せず
		領土問題　経済外交に重点を
		オスプレイ、操縦ミスこそ問題
	川	人為ミス操作が難しい証拠
8月24日	声	尖閣上陸　強制送還は妥当だ
		日中友好「魚釣りの島」を夢想
	川	投げ出した事も忘れて旗の下
		官房長官何が起きても遺憾だけ
		太公望ぜひ釣りしたい島があり
8月26日	声	「活動家」の扇動に乗らないで
		領土問題で溝つくらないで
		駐中国大使交代に疑問感じる
	かたえくぼ	『今年の漢字』　島　日本政府
8月27日	声	領土問題は冷静に話し合おう
8月28日	川	過去未来すべての事故は人為ミス
		日中韓天気晴朗波高し
		句作りが過激になって困ってる
	かたえくぼ	『親書返送』　食べちゃえ　白ヤギ黒ヤギ
	声	サミット開き情と理の外交を
8月29日	声	こだわりを捨て歩み寄りを（西部）
8月31日	川	オスプレイぜひ郵送で返したい

八月の投書で「領土問題」に関するものは、「声」が一六通、「かたえくぼ」が二通、「朝日川柳」が二一句であった。そのうち、韓国に関するものは、「声」三通、「かたえくぼ」一通、「朝日川柳」六句である。八月一七日香港活動家の魚釣島上陸とほぼ同時に、韓国を個別に扱う投稿は減少し、投書子の関心が香港活動家―尖閣諸島―中国の反日運動と中国との「領土問題」に移っていく。

投書における竹島に関する具体的な内容をみると、最初は、「いろいろな場所でやってる日韓戦」（「朝日川柳」8／11）、「調子外れの真夏のソナタ」（「朝日川柳」8／16）や「東海の小島の磯のお戯れ」（「朝日川柳」8／17）と韓流スターの竹島上陸と李明博大統領上陸とを組み合わせて笑いに落とし込んでいた。それが、「唐突に隣のおやじの胴間声」（「朝日川柳」8／16）、「煮えたぎるチゲ」（「朝日川柳」8／17）と不快感を露わにし、「国際世論へ訴えかけよ」（「声」8／17）「韓国に政府の真剣さを示せ」（「声」8／18）という対応への提言に至る。

こうした投書子の対韓国ないし韓国大統領の行為への反感を背景として、図4が八月一六・一七日前後に登場すれば、当該「政治漫画」と投書との関係が見出せる。「政治漫画」は韓国問題への「極化」に貢献した、と。

しかし、そうはならなかった。図4は八月二四日の掲載であった、「所作」は時空間的に直接であることが有効であることは、演説の身ぶり手振りを見ればわかる。「政治漫画」はこの時期、「オピニオン」欄として「社説」、「声」「かたえくぼ」「朝日川柳」と同じ紙面に掲載されている。仮に、上述したように一方で感情を昂進させる表現をしても、それを鎮静させる表現が同じ紙面に登場していれば、相殺され「両論併記」として相殺されるはずである。残念ながらこの八月二四日の「オピニオン」欄はそれには貢献しなかった。論説や投書の関心は中国との領土問題（尖閣諸島問題）に移っていた。この問題は、魚釣島に香港活動家と日本の地方政治家が互いに上陸を試みたことによる

「泥仕合」の様相を呈してきた。紙面が、韓国竹島と中国尖閣問題をまとめて収束させようとする方向にあった。その流れに「抗して」図4が登場したところで、もはやこの作品は李明博大統領個人の資質を問われる問題として理解されるにとどまったとみることができる。

4. 嫌悪感情と「政治漫画」

国家間の利益対立がしばしばナショナリズムを喚起させる。その喚起の触媒に「国民感情」がよく用いられる。その「国民感情」を煽るものの一つに対立国への嫌悪感情がある、そこで、「領土問題」に関する「政治漫画」の実相をより鮮明にするために、嫌悪感情を新たな分析指標として設定した（表2、表3）。

「領土問題」における「政治漫画」を嫌悪感情の指標をもとに評定し、「政治漫画」そのものの嫌悪の様相を探った。次に、関連する論説・コラムと投書から見られる嫌悪感情結果と比較し、「政治漫画」の嫌悪状況の相対的位置を明らかにしようとした。その理由は、3.－iiで述べたように読者が「政治漫画」を実際に新聞紙上で読むときには、掲載媒体の諸テクストとの関係づけて読むことが予想されるからである。

i 「領土問題」に関する「政治漫画」の嫌悪の様相

嫌悪原因については、合衆国やロシアとの外交を扱った「政治漫画」と同様に、「非魅力的外見」要素が指摘された。好意的とは思えない相手国のメディアを介した言動が「政治漫画」を見て活性化される。これは、「領土問題」「外交」一般を語った「政治漫画」の特徴とも類似していた。また、嫌悪対象への対応も、「穏便解決」を志向するこ

とが示され、これも合衆国やロシアとのそれと類似している。

これに対して、韓国との「領土問題」を扱う「政治漫画」に関しては、前述の国々とは違った傾向を見せている。嫌悪主体の「傲慢さ」を嫌悪の原因とする評価がなされ、嫌悪対象への当該行動の是正や改善を求める「積極的な解決」や嘲笑や皮肉を含んだ「意地悪な＝悪意ある言動を示す」表現志向が示された。こうした点からも、3－iで明らかにした日本と合衆国・ロシア・中国との関係が、少なくとも日本から見て対等から依存・恭順関係である一方で、韓国に対しては対等それ以下の存在としてみていることが示唆される。

ii　「領土問題」に関する「政治漫画」の相対的嫌悪の様相

「領土問題」に関する「論説・コラム」や「投書」は、4－iで示したことと同様に、中国と韓国とでは異なった反応を見せている。「嫌悪原因」「嫌悪対応」とも中国を対象にしたものは、「論説・コラム」では、程度の広がりを持った傾向を示す。それに対して、韓国を対象にした「論説・コラム」では、嫌悪の原因が日本と異質な存在であるがゆえ生じたものであり（「異質（性）」）、かつ積極的にその行為や姿勢の改善を求める「積極的解決」に集約される。中国との「領土問題」に関する「投書」については、「嫌悪原因」は多様であり、「領土問題」一般に起因する国益や国民感情を重視したものを包含するものであった。「嫌悪対象への反応」は、積極的解決を希求するものと「わりきった」対応を求めるものに二分された。韓国の「領土問題」に対する投書は、主に否定的態度への嫌悪が中心であったが、「対応」においては、取り入りや迎合はせず、ある時には改善を求め、ある時には米中ロ以外の諸外国のように客観的にあるいは接触を回避し、時によっては陰口や相手を貶める言動をする、などと多種多様な対応が見ら

れた。

中国に対する「領土問題」への嫌悪感情の傾向が、一般的な「領土問題」へのそれと類似していることは、「論説・コラム」だけでなく、「投書」にも「嫌悪原因」までは反映している。つまり、他国との「対外政策」としての「外交」（国益の現実的配分）が意識されているとみられる。ただし、感情のしかも嫌悪レベルにおいてどうコントロールしてどう対応すべきかという段階においては、まだ十分な検討はされていない。それは、「積極的な解決」という「正論」を主張しにくいところに表れている。

韓国に対する「領土問題」への読者の感情は、「交際」に対する「否定的な態度」に嫌悪感をもつが、どのように対応したらよいか中国に対する場合よりも戸惑いがある。有効な関係を築くための積極的な提言をするだけでは収まらないものを韓国（政府・大統領個人）に感じているとみられる。李明博大統領が日韓関係の架け橋を破壊する「政治漫画」が描かれる背景として、こうした読者の感情があったと考えられる。

Ⅳ　結論と課題

二〇一二年八月の「領土問題」を扱った「政治漫画」について、テーマとレトリックの視点、および文字情報との関連、嫌悪感情の視点から考察を行った。

「領土問題」と直接関係のないアメリカ合衆国との関係を含めた「政治漫画」から、日本との関係を読み取ることができた。すなわち、中国、ロシア、合衆国に対しては、程度の差こそあれ、包摂、忌避、批判と無力感といった劣

位状況を意識させる「フレーム」が見出された。それに対して、韓国については、感情的な非難や嘲笑を含めた批判的表現が見出され前の三国の様な劣位・劣等意識を見出せなかった。

新聞紙面の「文字テクスト」との比較においても、ほぼ同じような傾向が見出された。批判の点から見れば、個別事象への批判から「領土問題」一般への問題提起に移行していく流れも「論説・コラム」や「投書」では同様に見ることはできた。その場合には、韓国に対する「政治漫画」や「投書」には、韓国という国家に対する批判や非難に転嫁する可能性は見られたが、大統領個人の言動として責任を問うような形で収束させようとする動きが見られた。

個々の画像を含めた言説の相互関係をより鮮明にするには、S・アイエンガーの「エピソード・フレーム」と「テーマ・フレーム」などを用いて、それらの時系列的変化を辿ることが求められよう。

ネットの「領土問題」に関するデータをこの研究では取り上げていない。そのため、ネットメディアとの関係については推測の域を出ない。マス・メディアを素材としたこの分析から、韓国と中国との「領土問題」を扱った「政治漫画」のテーマがアイエンガーの「エピソード」的であれば、嫌悪感情を喚起させ、「テーマ」的であれば、諦観を含めた一般的、静態的な対応の提言を想起させることが読み取れた。このことを敷衍すれば、嫌悪感情の喚起を抑制させるには、「テーマ」的フレームを活性化させる「政治漫画」を描くことが手掛かりになることが予想される。あるいは、「所作」として、嫌悪感情抑制的な「コラム／論説」や読者「投稿」――とくに「コント」や「川柳」――が同じ日の同じ紙面に掲載されることで、仮に嫌悪感情喚起させてしまう「政治漫画」が掲載されても、嫌悪感情抑制的な「コラム／論説」や読者「投稿」によって嫌悪度が相殺される可能性があると考えられる。今後の課題としたい。

引用・参考文献

藤竹暁・竹下俊郎、二〇一八、『図説　日本のメディア［新版］　伝統メディアでネットはどう変わるか』、ＮＨＫ出版。

Gamson, William, A., and Lasch, Kathryn, E.1981, “The Political Culture of Social Welfare Policy, ” paper presented for the Pinhas Sapir International Conference on Development:Social Policy Evaluation: Health, Education, and Welfare, Tel Aviv University, Israel, December, 1980.revised.

Gamson, William, A., and Andre Modigliani, 1989, “Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power: A Constructionist Approach, ”*American Journal of Sociology*, 95, (1) , 1-37.

Gamson, William, A., and David Stuart, 1992, “Media Discourse and Symbolic Contest:The Bomb in Political Cartoons, ” *Sociological Forum*, 7, (1) , 55-86.

茨木正治、一九九七、『「政治漫画」の政治分析』、芦書房。

茨木正治、二〇一八、「「極化」報道の実証研究（ミクロ）――２０１２年８・９月の日韓報道の極化――」、（上村崇・塚本晴二朗（編）『「極化」現象と報道の倫理学的研究』、印刷学会出版部、所収）八三頁―一一六頁。

Iyengar, S., 1991, *Is anyone responsible?* Chicago. IL: University of Chicago Press.

金山富貴子、二〇〇二、「対人嫌悪原因の構造」、『日本心理学会第六六回大会発表論文集』、一四〇頁。

金山富貴子・山本眞理子、二〇〇五、「所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動」、『筑波大学心理学研究』三〇号、一三―二四頁。

金山富貴子、二〇一六、「組織や集団内における対人嫌悪」、『心理学ワールド』七四号、二〇一六年七月号、一三頁―一六頁。

河合隼雄、二〇〇六、『対話する生と死』、大和文庫。

北村英哉・唐沢穣、二〇一八、『偏見や差別はなぜ起こる？　心理メカニズムの解明と現象の分析』　ちとせプレス。

Medhurst, Martin, J., and Michael, E. Desousa, 1981, “ Political Cartoons as Rhetorical Form: A Taxonomy of Graphic Discourse”, *Communication Monographs*, 48(3) :197-236.